

バリア体験実習から見えてきたこと

ひろたにひろこ
 広谷浩子 (学芸員)

バリアフリーの先進館として

1995年の開館当時より、当館は万人に開かれた博物館として、バリアフリー事業にもいち早く取り組みました。担当者の奥野花代子学芸員(当時)を中心に、シンポジウムや講座などの他、誘導案内ボランティア養成や音声ガイド設置など新しい事業も行われました。このような事業の一環で、筆者は盲学校の生徒を対象に哺乳類の骨格や剥製を使った授業をおこなう機会を持ちました。障害を克服して学んでいる生徒たちの積極性や明るさに心打たれ、博物館の施設や展示が、いかにバリアだらけで不親切なものなのかを痛感しました。

2006年に「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」(通称バリアフリー新法)が施行されてから、対象を障害者に限定せず、性、人種、年齢、身体的特徴などすべての違いを配慮したユニバーサルデザイン(UD)を導入する施設がふえました。博物館・美術館でも、ユニバーサル・ミュージアムをテーマにしたシンポジウムが開催されたり、視覚障害者やコミュニケーション障害者への対応を目的とした講座や展示が行なわれるようになってきました。

当館のUD化は、誘導案内等の人的対応の充実という形で日常業務の中で進められています。しかし、十分といえるわけではなく、何かもっと魅力的な試みができないものかと考えています。

バリアフリー事業について、実践を通して考える機会があったので、この点をまとめてみます。

博物館学バリアフリー実習

一昨年より、桜美林大学の博物館実習で、「バリアフリーと博物館」をテーマに授業をすることになりました。私自身がバリアフリーの専門家ではないため、博物館での体験にもとづいて、「バリアを体験することとバリアフリーの実態調査」、「バリアフリー展示の作成と解説」という2つのプログラムを作りました。月曜午後の3時間を使い、3回完結のプログラムを年間に2回ずつ実施し

ました。1回の受講生数は7人から1人までさまざまでしたが、これまでのべ30人の学生が参加しました。

プログラム1「物にふれる方法を学ぶ」

バリアフリーについて理解を深める第一歩として、バリア体験から始めました。視覚バリアのある状態を想定し、視覚以外の感覚を使ってさまざまな事象を把握し、その様子をレポートしてもらいました。体験プログラムの作成にあたっては、日本自然保護協会(1994)の自然観察ガイドを参考にしました。実習の後半では、学内や公共施設などでバリアフリー化の実態調査をしました。以下に主なものを紹介します。

●触覚を使った観察＝触察

光学カメラのレンズ交換時などに使用するダークバッグに動物の骨や貝殻などを入れ、両手で触って中のものを識別しました。受講生は触察がよくできて中のものを正確に把握していました。しかし、未知のもの触察は難しく、触っているものの特徴をことばで表わすこともできませんでした。

この観察実習は、以前に盲学校でおこなった授業を再現したものです。盲学校の生徒たちは、頭骨の観察にあたって、大きさ、硬さ、表面の凹凸、重さ、細かい傷などの特徴を捉えて克明に記録しました。こうして観察した標本の特徴をよく覚えていて、次の標本との比較もできていました。部分はわかっても、全体の形を把握することはむずかしいだろうと思いましたが、こちらもよくできているので驚きました。動物の骨は大半の生徒にとって未知のものでしたが、どこをどのように触るか、どんな情報を引き出すかについて、すでに練習を積んでいる生徒たちは、課題を淡々とこなしていたのです。

●聴覚や嗅覚による観察

チャリンと落とした小銭を探す時にとまどってしまうように、音の定位は、時にむずかしいことがあります。実習では、聴覚だけで外界の様子を把握する音の地図作りをしました。みんなで

結果発表をすると、音世界の個人差が明らかになりました。また、嗅覚観察の体験として、クラフト封筒をあけて匂いをかいで、中のものをあてるというドキドキの体験も試してみました。

●目かくしトレール(野外観察)

大学のキャンパスの一隅で野外観察を行いました。木や草の多い場所に、ヒモを張り巡らし、アイマスクをかけた学生がヒモをたぐりよせながら進み、マークされた地点で、葉や虫などをさわったり、臭いをかいだりして観察します。触覚だけでなく、聴覚、嗅覚なども動員して、自然に触れてもらう実習です。ひとりで歩こうとすると足がすくんでしまうので、ガイド役の学生とペアになって観察してもらいました。

一連の実習を体験した学生たちの感想は、「疲れた」の一言でした。普段使わない感覚を総動員させて何かを把握しようとするため、ぐったりしてしまったようです。このように、バリアを持って観察することは、「漠然とながめて終わり」にする見学とは全く異質のものであり、非常に能動的な行為なのです。

また、アイマスクをかけた人を誘導して資料を触察してもらうようなガイド体験では、誘導のしかたやことば使いなどのむずかしさも実感できました。

●バリアフリー実態調査

誘導ブロック、エレベータ内の鏡、階段の警告音、トイレの案内板などのバリアフリー設備の実態について、参加者全員で学内を歩きながら調べて、学内バリアフリー実態図を作りました。



図1 アイマスクをかけた学生を誘導して、触察させる。

初回の実習では、学芸員志望の全員の学生が受講していたので、彼と一緒に調査を行い多くの貴重な情報を得ることができました。白杖を使いながら颯爽と歩く彼に導かれながら、誘導ブロックなどの活用実態について教えてもらいました。杖や靴底で感じる地面の凹凸や傾斜の微妙な変化が、重要なサインとなることも初めて知り、視覚障害者がとても繊細な感覚の世界に生きていることが実感できました。駅にある点字案内板や音声案内などの使い勝手に対する辛口批評など、この学生から得た情報はどれも興味深いものばかりでした。

プログラム1を通して得た、いくつかの重要な発見を以下に示します。

1. 視覚障害者にとって、視覚以外の感覚を使って事物を把握することは、集中力を必要とする能動的な観察である。

2. 誘導にあたっては、立ち位置や声かけのタイミングと内容などを事前によく学ぶ必要がある。

3. バリア体験は、障害者の日常的世界の一部を知るために有効であるが、実際の感覚世界はもっと繊細なものである。

プログラム2「バリアフリー展示の作成と解説」

第2のプログラムでは、展示の中に、バリアフリーの考え方をどのように反映できるかを考えて実践することをめざしました。「テーマと展示物の決定」、「展示物作成」、「列品と展示解説」をわずか3回で行う必要があったので、実習時間内に終わらない分は各自が持ち帰って作りあげました。

●学生主体で展示テーマ決定

バリアフリー展示とは、バリアのない状態で観察できるように工夫された展示のことです。博物館・美術館の展示の大半は、視覚に訴える形ですが、視覚以外の感覚で鑑賞できる新しい展示ができるか検討してもらおうと思ったのです。

学生が出してきたのは、「バリア体験そのものを展示で表現する」、「バリアフリーの実態調査の展示」という2つの案でした。

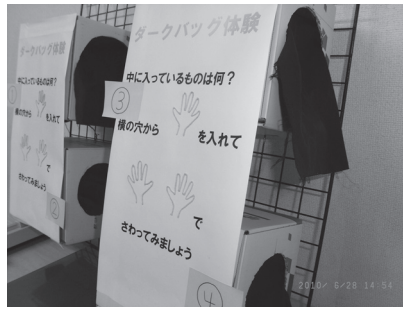


図2 狭いスペースでも展示ができるハンギングタイプのダークボックス。

厳密な意味では、どちらもバリアフリー展示とはいえません。前者はバリア体験展示で後者はバリアフリー情報の展示です。それでも、バリアフリーについて伝えたいという強い意志を尊重して、展示作りを進めました。具体例を紹介します。

●バリア体験展示の具体例

例1 触察クイズ

展示用のダークボックスをつくり、その中に入れたものが何かをあてます。中に入れたのは、動物の頭骨、松ぼっくりなどの自然物が主でしたが、保冷剤など意外性のあるものも選ばれました。

例2 嗅覚によるクイズ

中味が見えないビンに入ったものを匂いだけを手がかりにあてます。中に入れたのは、粉末スープやナフタリンなど匂いの強いものです。

実習最終日には、博物館学担当の教官・スタッフや別プログラムの受講生を招いて展示解説をしました。この実習で作ったバリア体験展示は障害者に対してではなく健常者（晴眼者）にむけて作られた普及啓発の意味を込めた展示です。この展示を通し、バリアがある世界について想像をめぐらすことができるようになればいいと考えました。

実習結果を博物館へ持ち帰って

以上の結果をもとに、博物館におけるバリアフリー事業、特にバリアフリー展示のあり方について考えてみます。

バリア体験から明らかになったように、バリアを越えて何か

をみることはエネルギーを必要とするとしても能動的な行為です。バリアをもちながらも来館する人々は、「みたい・知りたい」という動機を強く持っています。博物館側に「助けてあげる・触らせる」といった発想しかなければ、彼らがおもしろいと感じる魅力的な展示を作れるはずがないのです。

来館者の状況やニーズを把握し、UDを進めるためには、いろいろな立場の人々から日常的に意見をもらえるような体制が必要だと思います。冒頭で紹介した博物館・美術館のUD事業の中心には、自身が視覚障害や構音障害などを持っている方たちがいます。自分たちで始めるしかない・・・という現状はUD事業を広げ定着させていくことのむずかしさを物語っていると思います。

私のバリアフリー展示案

最後に簡単なバリアフリー展示案を考えてみました。題して「触ってびっくり動物の世界」。見た目だけではわからない重さ、感触、温度差などの特徴を、触察によって実感させる展示です。例1「哺乳類と鳥の骨の重さ比較」見た目の大きさが同じでも重さが全く違います。鳥は空を飛ぶことに適応して骨を中空にしているからです。例2「毛皮の違いと生態比較」ラッコやアザラシなど水生哺乳類と陸生哺乳類の毛皮の違いを触って実感してもらいます。水の中に入れた時の違いも試せるかもしれません。これらの案をもとに、早速試作品を作ってみたいと思います。どうぞご期待ください。



図3 ダークボックスで触察中の学生